

第26回

## 突撃!研究室訪問

# スポーツを産業に 松田 裕雄

筑波大学 体育系 講師



今回訪問したのは国内で最も歴史の古い大学の1つ、筑波大学。  
26回を迎えた本連載ですが、意外にも初めての突撃となりました。  
バレーボールのコーチング学が専門の松田裕雄先生、  
学群の枠を超えて面白い講義を行っていらっしゃいます。

取材・構成・撮影／編集部

## 突撃！研究室訪問

### 研究テーマは 歴史からスポーツへ

国内第2の広さを誇る筑波大学つくばキャンパス。東日本大震災で被災した総合体育館は、2013年春の新築に向けて建設工事が進められている。その光景を横目に、体育科学系棟にある松田先生の研究室へと向かった。

松田先生の専門はコーチング学。種目はバレーボールだ。この分野に進んだのは大学院からで、大学時代は法政大学文学部史学科でアメリカ史を専攻。卒論のテーマはアメリカ独立戦争についてで、高校の教員免許（地歴・公民）を保有するという、一般的な体育・スポーツの研究者とはやや異なる経歴を刻んでいる。

「もともとは考古学者になりたかったんです。その一方で、スポーツのことを勉強したいという気持ちもありました。それで4年生のときにスポーツに関する勉強を始め、大学院

の試験にチャレンジしたら奇跡的に合格。専攻もバレーボールである必要はなかったのですが、実をいうと、試験問題で一番答えやすかったのがバレーボールだったんです（笑）」

筑波大学は体育各部の活躍が著しく、バレーボール部も全国指折りの強豪。バレーボール研究室を希望する学生は誰もが、バレーボール部の指導に関わりたいたいという思いをもって、大学院進学後はバレーボール部でコーチをしながら学ぶことが多い。ところが、松田先生の場合はバレーボールでなければダメ、というわけではないから視点も違う。

「自分の“幹”はもちろんバレーボール。筑波にはいわゆる体育会の部活動以外にも、いくつかチームがあるので、そこで監督やコーチを経験しました。ただ、バレーボールだけでなく、自分の知らないことはなんでも知りたいという思いが一番にあった。だから、いろいろな研究室の勉強会にも顔を出したりしました」

修士論文も専攻のコーチングに関するものではなく、企業スポーツのクラブ化についてまとめた。ちょうどその頃は、企業スポーツが衰退し、クラブ化の流れが起き始めた時期。バレーボールでも、00年に新日鉄バレーボール部が本拠地の堺市に根差した地域クラブ化を目指して、堺ブレイザーズへと生まれ変わった。

コーチングを究める研究室にいながら、コーチング以外のテーマに注目したことがむしろ、指導教官であ

る都澤凡夫教授（2012年3月に退官。現つくばユナイテッドSun GAIA監督）の興味・関心を引いた。

「都澤教授は先見性のある方で、体育館での指導について追求していくことも大事だけれど、これからはバレーボールを取り巻く環境をどのようにマネジメントしていくかもコーチにとっては重要と、僕を助手として研究室に残してくれました。そして現在に至ります」

03年に都澤教授と『NPO法人つくばユナイテッドVOLLEYBALL』を創設。バレーボールクラブ“つくばユナイテッドSun GAIA”のGMや監督を務める傍ら、物販事業部やイベント事業部、スクール事業部、パートナー事業部を立ち上げ、スポーツの産業力向上に努めた。

### スポーツの価値から ビジネスを学ぶ

そして筑波大学の講師に着任した06年から、ある講座を開講した。全学学生が対象の『勇者の鼓動—未来を創るスポーツ王国論I・II—』だ。

当時の講座名は『地域を創るスポーツデザインプロデュース』で、100名を超える受講生が集まった。開講のきっかけは、大学教員になって自ら講義を企画できるようになったこと以外に、もう1つある。

「それまでにバレーボールでビジネスを手がけていたこともあり、その過程で素晴らしい方々にお会いすることができました。そうした方たちの思いや考えを学生にもぜひ伝えたいな、と。その頃はまだ講演会のようなイメージでしたが…」

10年から現在の講座名となり、“スポーツ・アントレプレナーシップシリーズ”と銘打ち、スポーツで起業する人材を育成するプログラムとなった。講演会スタイルだった教授法もガラリと変わる。学んだことがスキルとしてある程度身に付いていくように、毎回の講義ではディスカッションやプレゼンを行うようにした。また、講義前には事前に課題

## スポーツが教育に貢献できるウェイトは大きい。

を提出、講義後にはレポート提出が課された。

「当然、受講生は減ります（苦笑）。意義はあるけれど、プレゼンやディスカッションの準備や課題が大変と感じるのでしょう。裏を返せば、本当に学びたい学生が集まるので、むしろ非常に有意義な講義になってきていると感じます。大学院生や3・4年生など、就職活動や自分の将来を意識した受講生が増えました」

学外から招く講師は“勇者”と呼ばれる。歴代の勇者には、荒川静香さんや荻原次晴さんといったアスリートのほか、GM、経営者など様々な顔ぶれが名を連ねる。勇者の選定には、何もなかったところに価値を生み出し、マーケットをつかっていった人であることが根本。もちろん、取り組んでいる内容が革新的であることも重要視している。とはいえ、各業界の第一線を走る勇者ばかりゆえに、多忙な仕事の合間を縫うようなスケジュール調整が、松田先生の目下の悩みだ。

### 視野を広げて 専門分野に生かす

この『勇者の鼓動』には、続きがある。『勇者の鼓動』を受講した者だけが履修できる『王国の息吹』がそれで、今年から新たに開講された。

これは、スポーツの価値を理解する“素養”を磨くために、財務やマーケティングなどの基本的知識を学んだのちに、今度は“感覚”を磨くために基本的実務をインターンシップ形式で学ぶもの。国内外の企業や大学（王国）に協力してもらい、半年かけて行われている。最終的には、自分たちでビジネスを起こすと仮定した上で、ビジネスサマリーを作成して発表する、ビジネスプランコンペを実施する。

また、来年から開講を予定しているのが2講座に続く『浪漫の覚醒』。

『王国の息吹』で作成・発表したビジネスプランを、現実の社会で実行する。

「大学を卒業してすぐに起業は難しいですが、まずはそういうマインドをもってもらいたいですし、スポーツや文化で産業をつくってもらいたいです」

ただ、大それた話でしょうが、日本の大学教育では、実学や実務としてのビジネスはきちんと教え

ないですね。社会人になって初めてわかる部分が多い。ですから、この一連の講座には、働くとはどういうことなのか、価値をつくるとはどういうことなのか、というところを、学生が好きなスポーツを題材にして学習するという意味合いがあります。必ずしもスポーツで何かをしなければ、社会に出ていって自分の力で人の役に立ち、それで生計を立てていくんだということを、学生のうちから考えてほしいのです」

とはいえ、あくまで松田先生の専門はコーチング学。ゼミでは、バレーボールのコーチングをテーマに3年生7人を抱えている。その多くはバレーボール部の学生のため、「バレーボール部の学生にバレーボールを教えるのも…」と、演習では別の局面からスポーツを見て、それをバレーに生かせるようになることを目指す。

「どの道もスペシャリストは必要ですが、本当に好きな人は放っておいても自分で勉強するものです。けれども、視野を広げて多くのものを専門分野に生かすということは、実は半強制的にでも機会をつくってあげないといけません。ですから、コー



まつだ・やすお◎1976年、東京都出身。筑波大学大学院人間総合科学研究科修士課程修了。2006年より現職。専門分野はスポーツコーチング、及びビジネスマネジメント。筑波大学重点公開講座「醒めて起て！勇者の鼓動—スポーツの価値とビジネス」塾長も務める。00年より東西インカレをはじめ大小100を超えるイベントをプロデュースしており、06年にはVリーグチーム「つくばユナイテッド」をNPO法人として創設、10年まで代表常任理事を務めた。現在は同法人を退任し、スポーツビジネスにおける起業家育成プログラムの開発、及び関東広域のクラブリーグ事業（バレーボール）を通じたクラブスポーツ文化の強化と普及に力を注いでいる。

チングだけでなく、ビジネスやキャリアマネジメントの話もするようにしています。基本的に演習では、スポーツに関連する新聞記事をもってきて、そこから浮かび上がる社会的問題を考察するというをやっています。例えば、東京オリンピックを招致すべきか否かといったことなどを、司会者を決めてディスカッションしています」

今後の展望を聞くと、実はよくわからないんですよね…と苦笑いの表情を浮かべるものの、最終的には学校をつくりたいと松田先生。

「今でも実技の指導はしていますが、つくばユナイテッドにいたときに国内外のコーチングライセンスを取得して、監督とGMを経験してきました。そうした実技指導を通じた“人間形成”と、今取り組んでいるビジネスやキャリアマネジメントといった実務の勉強、実学を通じた“人格形成”。スポーツという題材だけで教育に貢献できるウェイトは、かなり大きいと思うのです。だからこそ、体育という領域にとどめるのではなく、スポーツの価値で人材が育成できるような学校ができればいいな、と思っています」



取材日は「勇者の鼓動」最終講義。これまでの勇者の話をもとめるため、グループごとのディスカッションとプレゼンが行われた